B35

宗教の眞髓

225
884

宗教の眞髄要目

内篇　宗教汎論

緒言

一、宗教不必要論を破す
二、宗教萬能論を破す
三、宗教に對する諸種の見解
四、宗教の本領
五、生死の辨別

外篇　宗教各論

緒論

一、神通の要義
二、儒教の大意
三、佛教の通義
四、基督教の大旨
五、各教の特長

補説　將來の宗教

宗教の眞髄

禿山莊　小野藤太

明治
37 12 14
内交

内篇　宗教汎論

緒言

維新前までは、宗旨とか、宗門とかいふ詞はありましたが、宗教といふ熟語は、滅多に用ゐませんでした。近來は宗教といふ語が、大層流行してまゐりました、そうして又日清戰爭前までは、宗教といへば、迷信である、老人や愚人の慰みものであるかのように見做されて居りましたが、近來は學者間にも、青年間にも、宗教が持囃さるゝようになつて參りました、それで宗教といへば、誰でもアヽソウカといふて直ぐ合點しますが、そんならば宗教とは何ぞやといふ問題を提起して、之が解答を求めたならば、何人も恐らくは、立派に答へ得る者はあるまい、否、人々の答がまち〳〵で一定することは出來まい、實に宗教といふことは、分つたようで分らぬ、古來疑多の識者が多大の勞苦を積んで、之が解釋を試みたけれど、今に至るまで完全なる定義を得ないのである、實に千古未決の疑問である。

併しながら退いてまたよく考ふれば、宗教といふものは一定して居る、明白に解釋され

得るものである、一定せぬとか、眞相が分らぬといふのは、宗教の外形だけ見るからである、成立宗教即ち佛教とか、基督教とか、又佛教内でも眞宗とか、禪宗とか、日蓮宗とかいふような、教派宗派の特徴相異點にのみ注目して、それを標準として解釋しようとするからである。

猶百尺竿頭一歩を進めて論ずる時は、佛耶、聖淨等、教派宗派は如何に多岐であつても、其の遣方は如何に相違して居つても、自力教といひ、他力宗といひ、現世教といひ、未來教といひ、一神教といひ、多神教といひ、汎神教といひ、常識教といひ、神秘教といふても、究竟最極の歸着點は皆同一であると斷言するとが出來る、從つて若しも此の同一點に達せぬもの、歸着せぬものであるなれば、夫れこそ正しく迷信である、邪教である、妄法であるといふて差支はないのである。

一体いづれの社會、如何なる人物と雖も、偏見といふことは免れぬことであるが、特に宗教社會、宗教家といふものには、偏見が甚しい、勿論自己の信仰であるから偏する位でなくてはなるまいけれど、之を學問として研究する場合は、極めて公平の考を以て居らねばならぬ、自尊排他的の固執があつてはいかぬことは謂ふまでもない所である、夫で私は今日は、研究的態度を執つて、公平の見地に立ち、先づ宗教の何たるかを明らかにし、それより進んで、各教派の本義を剔出して、其歸一點を搜索しようと思ひます。

元來自分のものとして、信念を確立するには、ドウシテモ自覺によらねばなりませぬ、

又これを充分自覺さすように道念を喚發せしむるには、一方には自己の境遇が自然そうなつて來なければならぬと同時に、又一方には所謂偉人とか有德者の感化力に依らねばなりませぬ、私は敢て諸君を感化するの力はありませぬ、單に唯諸君が、正しき信念を獲るに就て、若しくは既有の信念を益々確固ならしむるに就て、一つの材料を提供するに過ぬのである、希くはそのお積りにて御聞取を願い度……

一、宗教不必要論を破す

科學が發達して、物質的の文明が盛になるに從ふて宗教なるものの威嚴は次第に削減せられ、其極遂に宗教は野蠻人の迷信である、愚夫愚婦を誤魔化す跪計である、無用の長物である、有害なるものであるといふようになつた、尤も此の所謂宗教無用論、又は害惡論は、單に近時の文明と共に始めて起つたものではなく、古來より思想界の變動に伴ふて、毎に發生しつゝある所である、彼の希臘の古代、ヘラクライスト。エピクロース氏等が、宗教を以て一種の病的現象即ち人心の疾病なりとか、或は宗教は政治家僧侶が人民を籠絡する詭計に出てたものであると謂はれた如く、近時ではホッブス氏や、スチルチ氏の如きも、亦盛にこういふ說を唱へ、我國でも福澤翁や、加藤博士等は矢張この宗教無用論者の一人といふてよいのである。

夫から又宗教無用といふことを他の方面から論ずる者も少なくない、即ち政治法律があれば人民を統御するに何も差支はない、人民も亦由つて行ふ所、守る所を明らかにして居

る、それ以上に宗教等必要はないといふて居るものもある、或は道德倫理さへあれば、宗教等はいらぬといふものもある、それから又あるものは、宗教は必要としても、現在の宗教は迷信である、妄教である、故に少なくも現存しつゝある成立宗教は全く不必要である有害であるといふて居る。

發達せる科學を以て、在來の宗教、古今愚夫愚婦の信念宗教的行動を照らせば、所謂迷信といふべきものが少なくないは事實である、有害なる點の多きも爭はれぬ所である、それでかゝる點は不必要である、害惡であるといふのは、吾人も夙に唱導する所である、然れどもアル成立宗教、成立宗教のアル部分がいけないといふことと、宗教そのものが不必要であるといふことには、大なる相違がある、アルもの、アル部分がいけないからといふて、直に宗教の全部、宗教そのものをいけぬといふのは甚しき早計である。

元來宗教といふものは、人文史上の一大現象である、人生の不可誣的大事實である、そこで吾人は宗教の要否を議するに先ちて、まづ宗教は何故に人生の事實として存在せしか又存在しつゝあるかを明らかにせねばならぬ、即ち宗教の起源と其生存の因由を詳らかにせねばならぬのである。

宗教の起源に就て、政治家や僧侶が人民を籠絡する詭計に出たりといふのは、史的事實の許さぬ所である、勿論政治家が宗教を利用し、僧侶が宗教を營業として愚民を籠絡したことはあるけれど、夫は宗教の成立した後の事であつて、所謂宗教的の要求、宗教的の動

作は、未だ政治的結合を爲さぬ蠻民にも、獨居孤存の人にも存在して居る、殊に僧侶なるものはこの個人の宗教的動作が相合し一箇の教團として成立した後に現はれたものである つまり宗教といふものは、政治家僧侶以前より既存して居つたものである、人心必然の要求に出たるものである、即ち自然の歸趨は如何に、人生の目的は如何に、如何にすれば吾吾は、此の自然の歸趨と一致して、安穩に人生を送ることが出來るかといふことは、文野賢愚老若を問はず、苟も人間としての精神作用を有するものは、必ずや接觸すべき疑問であつて、その一方面の發展したるものは學問、即ち哲學であり科學である、又その實行的の一方面は道德となり、倫理となつたのであるが、此の自然の歸趨と一致して人生を安穩に送りたいといふ念は、所謂宗教心であり、宗教の根源である、それで愚人でも智者でもこういふ考のないものはないとすれば、宗教なるものは人生と須臾も離るべからざるものであつて、人類精神的の必然なる產物であると同時に、空間的には人類全体に、時間的には人類の發生より將來人間の存在する限りは、よしその形式は如何に變化するも、內的要素は依然として存在するもの、存在せざるべからざるものであるといふことは斷言しても差支はないのである。

二、宗教萬能論を破す

前の宗教不必要論の反對に、宗教さへあれば何もいらぬ、病氣を癒すも、金を儲けるのも皆宗教でなくてはならぬといふように、所謂宗教萬能を信するものがある、勿論病氣を

治するにも、金を儲けるにも意志の堅確自信の強きを要することはいふまでもなく、又醫者の見捨た病氣でも、所謂宗教上の信仰で快復することもある、お稻荷に百度參りをしてそれから段々金が儲かるようになるとか、不意に金が儲かつたといふよふなこともないではない、心理的の作用は如何なることにも關係して居るのは爭ふ可らざることである、併しそれであるからといふて、科學の發達せる今日、分業の盛なる專門的の方法が具備して居るのに、病氣だといつて醫者にもかけず、直ぐ藥師如來に願立をするとか、金米糖や腐水を頂くとか、金が欲くなつたからといふて眞面目に働きもせぬで、やれ聖天樣とか、お稻荷樣をいぢめるのも隨分如何はしいものである、否、實に困つたものである、これ等はホントの迷信といふてもよい。

自己の物質的利益の爲めに、神佛を勝手に崇拜するのは全たく迷信である、よし迷信正信は人智の高下に由うて岐るゝものであつて、迷信もその人に取つては矢張りそれで滿足であるといふならば、吾人は名を代へてこれを極めて劣等なる信仰、極めて有害なる……

……人心を頽廢萎靡せしむる邪宗教であると謂をふ。

要するに宗教の萬能を云云するものは、宗教の本領が、こゝに在らずして彼に在るを知らぬからである、宗教の眞髓を辨へぬからである、所謂ヒーキの引倒しである、宗教を鼓吹するものでなくて、其實却へて宗教を傷づくるものである。

夫から序に一言して置くのは、宗教萬能主義と均しく笑ふべき教權主義のことである、

教權主義とは自宗所立の宗義を神聖視するの餘、明らかに時代思想の許さゝる所までも固守し、或は自宗のみを眞正のものと爲し、他をば僞宗教として排斥せんとする等、宗教の目的、宗教の眞髓の一貫するものなることを廣義に解釋し、又はそを濫用して、宗教の形式及解釋の發達變遷すべきものなる事實を否拒せんとする頑迷の見、又は苟も一箇の宗教として成立し居る以上は、必ずやそれ相應の特長あり、人生の機微を穿ち居るものなることを察せずして、徒に自負排他の偏執を恣まゝにするが如きものをいふのであつて、自宗の神聖獨尊を知つて他を排する位にあらねば、堅固なる信念と謂ひ難しといふものもあるけれど、夫は頑固偏見と確固自信との別あることを知らぬものの言である。

三、宗教に對する諸種の解見

前述の排斥的惡意を以て、宗教を疾病なり、詭計に出でたるものなりと爲す他、事實的見解に付ても亦種々あるが、要するに外面的と內面的との二に分つべく、その外面的とは宗教を以て神佛に對する禮拜、死者等に對する儀式と爲すものである、此は成立宗教の有する事實である、併し宗教の全体ではない、一部分である、形式的部面である、決つして宗教の本質ではない、既に形式といへば習慣の極不知〳〵これを爲すに至つて居るものといへども、必ずや內面的心的要素の之に伴ふものあることは謂ふまでもないことである。

次に又內面的見解即ち宗教の本質は吾人の精神界に存在するものであると爲すものには甲は此の內面的要素即ち宗教的意識の如何なる心的作用なるかに就て、全く智性に在りと

論じて居る、即ちスピノザ、ヘーゲルン氏の如きは、宗教は有限の我が自己の本質たる絶對我を知るに在りといふて居る、これは哲學的證信即ち宗教なりといふので、知と信とを全く同一視して居る、所謂學問萬能論理性主義である、又乙は獨斷的感情主義を取つてシユライエル、マツヘル氏等の如く、宗教は有限の吾人が無限に對する直覺的の感味即ち絶對依賴の感情なりといふて、理性主義に反對して居る、又丙はカント氏等の如く實踐的理性即ち意志的作用として、無上命令論を主張し、道德即宗教說を取つて居る、我國でも現時の學者は種々と見解を下して居るが、つまりは上述の三說を出でぬのである。

元來人の心的作用は有機的統一のあるもので、智情意の區別の如きは、學問上便宜的の區別に過ぎぬことはいふまでもないことであつて、從つて又宗教を以て單に理性的とか、感情的とかいふ一方面より解釋せんとするのは到底穩健の見解でないのは明らかである、從つてその一方面に偏する信念は、結局完全のものでない、一時堅固なようでも、冷熱忽ち地を交ゆることがある、要するに吾人は精神全体の滿足を要求するものである、宗教は人性全体の事實である、唯一である、分割すべからざるものである、人心統一的の滿足を要求するのが宗教意識必然の性能である。

四、宗教の本領

宗教とは何ぞや、宗教とは我々の心の中にある苦を拔き取りて安心せしむるものである心中に苦、不平のある間は、どうしても眞の活動は出來ぬ、宗教的生活ではない、他の毀

譽褒貶を意とするようでは、眞の善でない、道德的行爲でない、毀譽褒貶に由つて働くのは僞善である、心中に不平苦痛があれば、どんな活動をしても、それは皆盲動である、惡魔の所作である、僞善盲動が社會を腐敗させ、人道を破壞する第一の動力である、眞に恐るべきパチルスである。

吾々には固より善い心もあれば、樂しい時もある、併しながら比較的に、惡い心、苦しい時が多い、所謂煩惱といふものが絶へぬ、これは理窟よりは事實である、どんな賢い人でも、口や筆ではどんな立派なことをいふて居つても、自ら省みれば一點疾しきことのないものはない、苦痛不平のないものはない、否、口や筆で立派なことをいふ、ゑらそうな者に却つて多くの疾しきことや、不平があるものである、恐怖、嫉妬、貪慾、怨恨、不平あらゆる劣等なる感情は、ゆくら理性の發達した者でも、これを全たく制御することも導くことも出來ぬのみか、その甚しきものは理性を誘惑使嗾して、却つてその非を遂げしめんとして居る、即ち理窟によつて劣情を恣まゝにし、若くはその表面だけを誤魔化さんとして居る、滔々たる今の世間は、殆んど此種類を以て充滿されて居る、これは論より證據、ゑらいもの、貴ぶべき社會、即ち學者教育宗教家等に、惡人罪人の多く、卑劣な行動の行はるゝので明かではあるまいか。

哲學とか、心理學とか、そんなものは暫く措いて、兎に角吾々には煩惱がある、心の中に苦痛がある、生計の上に對しても、交際上に於ても、或は學術の方面に於ても、若しく

は生死の問題に對しても、どうしても苦痛、不平を感せずには居られぬ。

心中の苦はどうして起るか、どこから來たか、いふまでもなく利己的、主我的の精神から來るのである、箇人たる自己のみを見て他を見ぬからである、自己の利害得失のみ考へるからである、現在的の安危苦樂のみに注目するからである、つまり自己を中心としてその目前の事ばかりを見るからである、現在の安樂、肉体的の快樂、外形の虛飾のみを事とするからである、勿論吾人は亦決して肉体的の快樂や、形式を全然不可なりといふのではないが、利己的精神だけから出づる考はすべて間違つて來るのであると斷言して置のである。

利己主我といふ精神を抑へねば、萬事が本當にゆかぬ、所謂無我にならねばならぬ、無我といふことを世間では誤解して、仙人の出來損い見たように思ふたり、又は丸で意氣地のないものになるように思ふて居るが、それは大なる間違である、無我といふのは主我や利己に對して無我といふのであつて、その內容から見れば、實は眞我である、大我である利己的主我的の精神があれば、どうしても大我的の活動は出來ぬ、眞面目の動作も出來ぬつまり自分の事だけより以上は出來ぬで、その結果は自苦自滅に了るではないか。

一切の宗敎はこの無我になつて、それから更に大我的眞面目なる活動を爲さしむるに在るのである、これが一切宗敎の實際上の契合點である、總ての宗敎の中心である、鈕樞である、宗敎の目的は全たく無我の活動この五文字に在るのである、理論解釋の高下とか、

形式の單複に依つて、敎派宗派は種々に分別されては居るが、此の無我の活動といふ點に差異はおるまい、若しもこの點、この中心、この眞髓、この本領、この目的が無つたならば、若しもその目的がこゝになかつたならば、それこそ迷信である、邪法である、社會人心を救濟するものでなく、却つてこれを惑亂せしむるものである。

無我では仕方がないといふけれど、無我にあれば拘束がなくなるから、自由自在の大々的活動が出來るものである、發して節に當るものである、知らず〳〵善いことが出來るのである、動機論も結果論もあつたものではない、何主義とか、カニ主義とか、そんなことはとんと必要はない、心の欲する所に從へども矩を踰へずといふもこゝである、神隨といふもこれである、無爲の大爲とか、無住の下より起つて動くといふ菩薩行もこれに外ならぬのである、神の攝理といふも、救濟われたといふも、つまりはこれに過ぬのである。

理想的とか、實現的とか、神祕主義とか、常識主義とか、猶又社會主義だの、國家主義だの、紛々たる主義の共進會、詮しつむればいづれか利己に墮せざるものあらんやである主義〳〵等いふような奴はまだ決つして宗敎的安心を得て居るものではない、宗敎的生活を爲しつゝあるものではない、畢竟主義を看板に甘い飯を喰ひたいといふに過ぎぬのである、佛敎と標榜して居つても、基督敎といふて居つても、佛敎でも、基督敎でもない、否、宗敎でも、道德でも、政治でもない、蠻人の褻語である、蛙鳴蟬噪である。

何の苦も不平もなく、各自に相應の職務を勉めてゆけば、世の中は大平である、元來こ

の社會を組織するに必要の職業でゝへあれば、何等の職業でも皆同一の價値のあるものである、人間の價値は決つして職業に由つて變ずるものではない、ゆくゝ學者でも大臣でも心に苦みがあつて、不平だらゝでやつて居れば、なんにも尊いことはない、矢張り盲動である、惡魔の業作である、草むしりでも、車夫でも、これが自分に出來る仕事、自分の天職と信じ、何の不平もなく、眞面目にやつて居れば、實に尊いものである、神の動作である、菩薩の行ひである、不平なゝ眞面目に活動するのが人生の本義である、宇宙萬有の眞相である。

何の不平もなく眞面目に活動いて休息する所は、涅槃である、茅茨の屋でも天國淨土と異はない、まづいものでも甘く喰へる、百味の御食である、よし社會百世の後まで感化を及ぼし得ねとしても、一家一鄕、若しくは同業者間、一部社會の間に不滅の感化を垂れ、善惡應報の理は炳然として寸毫違ふ所はない。

甘いものを喰ふて遊んで居る金持の隱居等を、仕合せだ、幸福だ等羨やむには當らぬ、彼等は甘いものを喰ふても、遊んで居る爵で甘くない、食物に棄てられて居る、甘いものを喰ふても甘くない、實に酷ひ制裁ではあるまいか、うはべばかりでは計算は立つものではない、僞善でも矢張りこれと同じである、學問を勉强するのでも、眞理の爲めに信じてやるのと、名利のため、役目のためにやるのは、同じく此の差別がある。

要するに利己的主我的精神をすてねば、どうしても心の苦痛不平は絕へぬ、無形の地獄

に繫がれて居るものである、充分な活動は出來ぬ、眞面目な作業は六ケ敷い、無我といふことは決つして意氣地のないことではない、よし眞に意氣地のないこととしても、利己的の盲動には勝るのである、我利〳〵で表面幸福に暮すよりも、無我で餓死した方がよろしい、食は絕つべし道は須臾も離るべからずである、即ち肥た豕よりも瘦た人間、畜生の資格で生存するよりも、人間の資格で餓死した方がよいのである、否、無我になれば生死共に眼中にないのである、餓死しても立派な死である、感化ある死である、死然を得て居るものである。

心の苦痛を去るにはどうすればよいか、主我的精神を棄て、無我になるにはどうすればよいか、それには種々とあるが、つまり三つに概括することが出來る、第一は理性で以て劣等なる感情、即ち苦痛不平を抑へこれをよい方に導くこと、言を換へていへば智識を磨き、宇宙人生の眞相歸趣を明らかにして、その道理の力で惡い考や、苦しみ不平を制するのである、宗敎の上でいふ自力門とはこの事である、このうちには道德的の習慣力、換言すれば意志の力で劣情を抑へるのもある、これが主として所謂道德敎に當るのである、第二は高尙な感情で劣等なる感情、所謂苦痛不平を壓抑するので、即ち敬虔とか慈悲同情といふ考を以て、惡念を抑へ、貪慾、瞋恚等を制するのである、これが一歩を轉ずると所謂他力敎になるのである、第三は智性と感情との調和、圓滿なる發達を爲さしむるので、自力門他力門、理性主義、感情主義、道德敎、神秘敎の總てを圓融せしめたものである。

要するに學問の力でも、學問はせぬでも人生の實驗の上からでも、兎に角宇宙人生を達觀して、確乎不動の見識、即ち人生觀といふものを確立し、よしその人生觀が學問上價のないものでも構はぬ、それが自分の生活の中心となり得るものでさへあればよい、そうしてそれに由つて他の私を交へぬでやるのは、均しく無念の活動である、宗教的安心を得たものである、夫から又宇宙とか人生とか、總ての事は到底吾々の力には及ばぬ、そういふものは吾々以上の力、吾々を支配する力、絶對の指圖に任せておいて、吾々は別に何の心配も苦しみもせずに、出來るだけのことをやつて居るといふことに落ち着きて居る、これも矢張り無我の活動である、宗教的生活である。

春花秋月山川湖海、天地自然の美に誘はれて脱化するのも、哲學的深遠の觀念に由つて解脱するのも、道德的の習慣に由つて馴致するのも、崇高敬虔の念に由つて靈化するのも歸する所は絶對と冥合し、自我を沒却するのである、小我が大我に歸するのであるハ盲動が活動に轉するのである、不安が安穩に、制縛が自由に變ずるのである。

夫から宗教上の所謂信とは何ぞ、確乎不動の精神なり、畏怖なく苦痛なき精神の狀態なり、人生活動の原動力なり、人間の根本的性格なり、雄大なる詩も、文章も、畫も、事業も皆これより出づ、總べての感化は悉皆信に由つて起るものである、信は實に人生の活力である、生命である、信仰なきの生活は醉生夢死である、獸的生命である、器械的發動である。

人生の意義を解し、吾々はかく〳〵すべきものと自覺して動かぬのも信仰である、絶對の力を信じ引いて以て敬虔の念を起すのも信仰である、自信は活動の原力である、敬虔は不知〳〵惡に遠ざかり善を爲すの力である、敬虔と自信といふことは實に人生の命脈であるも、敬虔と自信のない奴は、勿論人として論ずべきでない、猛獸である、毒蛇である。

世の生意氣な青年は、絶對の力を信ぜぬものがある、自然の支配方を辨へぬものがある實在の威力を知らぬ輩がある、見よ吾々は有形的にも、父兄、主長、晝夜、寒暑の支配を受けて居るではないか、吾々は決して獨存孤生のものではないと同時に、何ものにか支配され、又何ものをも支配して居る、有力無力、主伴具足の關係はどうしても免れぬのは事實である。

そこで、吾々は自らを信ずると同時に、絶對をも信ぜねばならぬ、自らを信ずるのは決つして利己でも主我でもない、自分が他の萬物と相關係して居つて、自分の感化が一切に連絡がある、從つて利己的不義不德と爲てはならぬ重大の位置を有つて居る、從つて又吾々は自覺し眞面目なる活動を爲す力を有つて居るといふことを自ら信ずるのであるから、利己的主我でなく、空寂的の沒我でもない、無我から眞我を覺り、小我から大我に歸るのである、大我たるを我を信ずるのである。

自ら信ずることが篤ければ、こゝに勇猛精進の大活動力が起る、これは必然的の現象である、又既に自信は如何に强くても、絶對の威力を信ぜねば、敬虔の念が乏しい、どうし

ても勝手が出る、遂には利己に墮落する、口ではなにそんなことはないと謂ひ得るが、實際は墮落する、敬虔の念の乏しいものほど始末のつかぬものはない、敬虔の念が熾になれば精神が何時も清淨である、遂には歡喜の念に進む、活動はます〳〵熾になる、これが眞の樂天である、眞の活動である。

絕對と個人とは精神に由つて連絡されて居る、三位一体とか、三即一といふのは、此の意味に於て不可はない、併しその精神には絕對的方面と、個人的方面とがあつて各別に動作こうとして居る、これを融和するのは敬虔の念である、既に融和すればこれより見れば すべて我であるが、彼より見れば絕對それ自身である、三即一である、三位一体である、三諦圓融である、畢竟大我である、一神論も、多神論も、汎神論も、人格非人格超人格論もこゝに至つて別に價のある議論ではないことになる。

要するに信は力である、絕對の力が信の媒介に由つて箇人の上に現はれ活動するのである、敬虔は絕對の力を箇人の上に誘出する案内者であると同時に、又その宿所である、絕對がこゝに止宿しつゝある間は、吾人は如何になまけようと思ふても、なまけることは出來ぬ、如何に惡いことをしようと思ふても叶わぬのである、吾人は如何にもして絕對の力を不斷吾々の上に宿らじて置かねばならぬ。

五、生死の辨別

死に死んで死の終りを知らず、生れ生れて生の始めを知らぬ、生の始めを知らぬから生

を誤まるのである、死の終を知らぬ死を誤まるのである、生を誤まるのは夢死である、死を誤るのは醉生である、死を恐れ、生を輕ずる共に大なる誤りである。

生の途中に於ける順序は、進化論でも何でもかまわぬ、要するに吾々は絕對の現はれである、實在の活動的現象である、その生や決つして偶然ではない、天壽、病健、醜美、智愚共にはそれ〳〵重大の責任を以て生まれたものである、換言すればいづれも實在の活動を圓滿ならしむるために、それ相當の役目を以て生れたものである、今少し平易にいへばこの社會を發達進歩させる爲めに、それ〳〵の役目を以て生まれたものである、それで、その役目のすまぬ中は決つして死んではならぬ、銘々の天職を覺り信じて働かねばならぬ、その代りに役目さへ濟めば何時死んでも構はぬ、死を恐れてはならぬ。

死は止なりである、活動の休止である、具体的箇人の滅亡である、古來死といふ問題程面倒なものはない、今の若い者は死の問題を樂めて輕々に見て居るが、それは誤りで、死といふ問題が落着し、死といふことに對する覺悟が定まつて居らねば俱に語るに足らぬものである、死の研究は畢竟の生の爲めである、死の覺悟が定まらねば生を誤るのである、もし困難に遇ふて挫折するのも、危急の際に卑劣不德の振舞を爲すのも、つまり死の覺悟が定まつて居らぬからである、死の覺悟の定まらぬものには少しの餘裕もない、戚々として自ら縛れて居る、無暗にもがく、あせる、生を貪る、到頭折角の人生をめちや〳〵にして仕舞ふ。

死ぬる位はなんでもないといふものがある、けれどこれは生を輕ずる自棄であるか、左もなければ口ばかりである、口ではなんといふても、まさかの場所になれば逡巡するのである、從容として死に就くといふことは頗る六ケ敷いものだ、實際死ほど恐ひものはない無暗に死を恐れぬものは畢竟狂人であると同時に又、どうで免れぬ生命、一度はどうしても死ぬるものを、無暗に死を恐れ忌むのも愚の極である。

實際死を恐れぬものならば、罪惡の起る譯はない、貧乏で泥捧をするのも、畢竟死が恐いからである、死が恐くなければ餓死しても泥棒する譯はない、間には自分のためでなく親の爲めとか、子の爲めとか、主人の爲めとかに惡いことをするといふが、これもつまりは生死の理に迷ふて、死を恐れるのが原動力である、例へば親を養はん爲めに泥捧するよりは、寧ろ餓死させた方がよい、泥捧は餓死よりも惡いものである、充分働き、出來るだけのことをして、その上食へぬ時は、餓死するがよい、こういふ餓死は餓死も亦死然を得たものである、それを餓死させ得ないといふものは、矢張り自己に死を恐れる念が對他的に活動して居るのに過ぎぬ。

生を輕じてはならぬ、自棄してはならぬ、併しながら決つして死を恐れ忌んではならぬ死は人生の免れぬものである、何時か一度は死ぬる、免れ得ぬ死を恐れ忌むのは、丸で譯のわからぬ話だ、死は決つして恐くはない、否、恐くないことを自覺せねばならぬ、死は恐くはないが、死然を得ぬのが恐いのである、死の恐くないように、死然を得ようと思へ

ば、人生の意義を覺つて、生に盡さねばならぬ、自分の生ある限り、出來得るだけの天職を盡さねばならぬ。

死んだ先き、所謂未來の事は、どうだか實際わかるものではない、わからぬことはわからぬとして置いてよい、是非わからせねばならぬ必要もなく、又わからぬからといふて全然未來を撥無せぬでもよい、否、わからぬかわからないといふのは論理に矛盾するものである有無共に斷當二見に外ならぬのである。

吾人はいづれにして吾人が生存間に於ける活力、即ち作業の餘力、感化力といふものは何時までも存在して居る、不死である、決つして滅絶するものでないといふことを、確く信せねばならぬ、大なれ、小なれ、善なれ、惡なれ、兎に角吾人の活動力は、この現在の社會に於て、未來永遠、即ち第二の現在社會に於て連續し、動作して居ることは明かな事實である、正成の活力は、日清の役にも、日露の役にも、否、正成以後の總ての戰役に加わて居るのである、不死である、不朽である、無限である、よし正成の如くでなくても、一會社の職工でも亦そうである、一車夫でも又それ相當の範圍に於て、不死である、無限の存在である、肉体形容も亦これと異ならぬ、若しくば子孫の上に、よし子孫はおくても種族の上に於て、生理的心理的相互の關係的現象の上に於て、連續發動するものである、即ち吾人は重盛の子孫にもあらぬが、その溫和沈勇の相貌を追慕憶念して、遂にその幾分を子孫に遺傳することが出來、無盡重々の連絡關係の上に、永久無限に心身共に不滅の存

在である、我々が肉体の死亡は、畢竟蟬の脱皮である、蛹の變態である、生理的活動の衰へたるのを改新するに過ぎぬのであると思へばよいのである、こういう意味に於ける未來の現在を想へば、君人は敬畏の念が起らねばならぬ、自棄する譯にはゆかぬ、あらん限りの力を盡して、よいことをせねばならぬ、要する宇宙の大局より見れば、生死は畢竟位置の轉換形狀の變化に過ぎぬ、無常の中に自ら常住あり、動の中に自ら不動がある、生滅の内に自ら不生の理を具して居る、生死不二である、心身は別離のものではない、過去、現在、未來もつまり一貫の常在である、未來主義も、現世主義も、生も死も、こゝに至つて價のなき問題になつて仕舞ふた、歸する所は生死一切を放下して無我の活動を爲すに在のである。

外篇　宗教各論

緒言

宗教の何たるかは昨日その概略を陳べましたに由つて、今日は現在成立して居る大宗教に就て、其の要旨を辨じます、其の第一に我國の神道のことを陳へますが、神道にも種々ありますけれど、私のいふのは國体と相伴ふて居る神道のことで、祖先崇拜、惟神の觀念に就て大要を明らかにしたいと思ふのです、神道や儒教は宗教ではないといふものもありますが、それは見方でどふてもいへる、私は今一つの宗教として論する積りである。

夫から神道のことは燈臺下暗しで、却つて克く知らないものが多いから、比較的に詳しく申し、儒教や、基督教はその極致点だけ一言して置ましよう、又佛教は教義が理論的で非常を複雜になつて居りますから、少しは永くなるかも知れませぬ。

元來世界には幾百といふ宗派教派はありますが、最局の目的は全たく同一に歸するべきであることは、前述の通りであるから、偏見を挾まぬで尤も公平に各教各宗派の眞相を糺すのが肝要であると信します。

一、神道の本旨

人種の根源は一つであるか、多であるかは、敢て問ふを要せぬ、兎に角現時の各國民は各自の多少の特質を有て居ることは疑ひない所である、かゝる特性は如何にして發生せしかを研究するのは、頗る趣味ある問題である、而して之に對する吾人が研究の結果は、全たく下の如くである、即はち一國民の特性は、信念思想の本質精髄と云ふ事は、一に建國事情の如何に存するものであると云ふことである、日本國民の特性信念の實質は、我國の建國事情と相伴ふものである、支那人民の特性も、露國人民のも、米國人民のそれも、皆同一である、而して此の建國の事情が永續するだけ、それだけ國民の特性が一貫して發達するものである、又民族は同一であつても此の事情が屢々變更すれば、するだけその國民の特性信念が動搖して、遂に支離滅裂しゆくのである、前者の好例は日本であつて、後者の適證は支那である、印度である。

建國の事情と云ふものは、斯くの如く民族信念の上に於て、又はその消長に於て、至大の威權を有するものである、そこで吾人は各自の建國事情を詳かにすると同時に、由つて以て自己信念の因由本質を自覺し、益々其の圓滿なる發達を圖るべく、之が修養を怠たつてはならぬのである、自己特性の發揮と云ふことは、決して排他ではない、保守頑迷ではない、多くの資料即はち外來思想、時代思想を咀嚼し、同化させ、之等を肥料として自主的生長を爲すべきを云ふのである、此の所は實に深く注意すべきである、若し一歩を誤れば頑迷に墮するか、又は浮動に失するか、共に救ふべからざる弊に陷るものである。

全體我が日本の建國は何人も知れる如く、天より降りしと云ふ冒險的遠征隊的の人種に由つて開始されたのである、元來この冒險とか遠征と云ふことは、二つの特性を發生せしめ、又これを企つるようなものは本來二つの特性を有するものである、その一つは死を畏れぬと云ふことで、既に死を恐れぬ位であるから自己の現在の利害得失等には餘り意を留めぬのである、換言すれば我慾と云ふものが少ないのである、廉潔等云ふ美德は自然とこれから發露するものである、此の根源から出でたのでなければ眞の廉潔ではない、又勇氣と云ふことも固よりこの無我死を恐れぬと云ふ觀念より出でたものでなくては役に立たぬのである、眞の勇ではないのである、夫から第二は同情一體と云ふ考の深いことである自ら逆境に立つたものでなければ、他の逆境の苦が解し難いと同じく、又自己の鄕土を去つて生死不明の位地に在るものは、同侶に對する友愛の情が盛なものである如く、冒險と

か遠征とか云ふものは、一方に死を恐れぬ大勇氣があると同時に、又其の半面には必然的に實際的要求より出でたる同情の念が厚いものである、殊にかゝる場合であるからその同伴者に對しては父子兄弟も啻ならぬ友愛心と云ふものが燃えて居るのである。

然り而して我國建國の起因なる　天孫の降臨と云ふのは普通の冒險隊ではなく、軍隊的の組織ある遠征隊的のものであつたから、所謂友愛心と云ふものは上下一体の觀念、即はち上は下を慈み、下は上を思ふと云ふ、仁と忠とになつて居るのである、それで我國民と皇室との關係は先天的に君臣の系統をもつて居るものである、他の侵畧的建國に由つて相互敵の系統が、一時君民の關係を結んだのや、或は車夫が客を乘せて居る間の主從關係とは自ら異なる點があるのである、勿論　天孫降臨以前に　神武開闢以前に土人がなかつたではない、又その子孫が全く無いでもない、或は又後世三韓支那より歸化したものもあるではあろうが、今日の國民の大部分は當時の遠征隊たる將士の子孫が、又はその主長たりし　皇室の分家たるものである、それで我國民相互は全つたく同侶同志の關係であつて皇室と國民とは譜代累世の君民、又は宗家分家の關係である、殊に又建國以前に多少土人はあつたけれども、未だ決して國家の体裁を備へて居つたものでないのは勿論であれは、彼の既に建國してあるものを征服したのとは大なる徑庭があつて、謂はゞ新世界の發見である、そこで　皇室と國土と國民と云ふものが全然不可分一體の性質を有することになつて來て居るのであつて、しかも又此の關係が建國以來一回も破壞し、動搖することのなか

つた爲めに、益々牢固拔くべからざるに至たつて居るのである、左れば我國民にして苟もこの上下一體の觀念即はち忠と云ふ考へがなくなつたならば、それこそ日本は精神的亡國の時期である。

支那の如く、最初土着的に、平和的に建國したものは、その人情の自然のまゝでドウシテも孝と云ふ考が尤も克く發達すべきものである、實際に於て亦然りである、それから後に政權の屢々變更して君家の交代が多かつたため、忠と云ふ觀念は遂に發達する餘地がなきのみか、時に或は君家と云ふものは盜賊の如きものである、敵であると云ふような考を起すのである、又西洋各國の如きは多くは移轉的の人民であるから夫婦の愛、愛と云ふものが克く發達して居る、今の移民殖民の如く相伴ふものは老幼即ち親や小供でなく、必ず夫婦である、相對の男女である、壯者である、又彼の北米合衆國の如きは本來は移殖民であると同時に、又頗る冒險的の性を加味して居る、殊に獨立戰爭のために共和と云ふ無上の特性を發生せられたのである、勿論忠も孝も夫婦の愛も、皆人情の必至である、從つて何國民も、何人も之を備へぬものはない、唯今はその建國事情に伴ふて、比較的に其發達の程度を異にせる點を示したのである。

死を恐れぬと云ふ考、自己の利害を顧みず、我慾を捨て自我を沒し、上下一體の觀念に由つて活動すると云ふものが、我國の所謂忠である、所謂大和魂の精髓である、所謂惟神の大道である、詩に所謂思無邪である、孔子の所謂仁である、心の欲する所に從へども矩

を踰へざる境界である、孟子の所謂浩然の氣である、老子の所謂虛無の大道である、佛敎の所謂無我の大我である、如來の活現である、光明世界である、基督敎の所謂靈の生活である、他の敎へんとする所のものは、既に我に在るのである。

又我國の祖先祭祀は道德上に所謂宗敎的意味を有するものであつて、祖先祭祀と同時に英雄崇拜を意味するものであり、又絕對憑依の觀念を表示するものである、それで我國の神道が自然崇拜敎であるとしても、又多神敎であり、交替神敎であるとしても、ナンデアツテモそれ等の乾燥なる分類學は吾人の今關係して居る所ではない、歸する所は祖先祭祀と英雄崇拜とを一致せしめ、更に此等の崇拜を通じて絕對に交涉するに在るのである、夫でこの祖先祭祀と英雄崇拜の一致と云ふことが、道德上宗敎上即ち人心感化の上に於て、人格修養の上に於て、人生活動の源泉として幾何の價値を有するべきであるかと云ふことが實際問題である。

吾人はこゝに斷言するのである、祖先祭祀と英雄崇拜の一致と云ふことは、人情必然の極致であつて、道德情操の尤も崇高たるもの、宗敎意識の極めて穩健なるものであつて、人間活動の尤も深遠なる源泉であり得るものと云ふことである、元來神先の祭祀、終りを愼み遠きを追ふと云ふことは、人情の必至であり、道德の根源である、片輪的の哲學者や、妙に捻ねくつた悟道者は兎も角も、祖先に對して死んだものであるからドウデモヨイと云ふような考へを以て居るものは、實に卑むべき人間である、輕薄の小人である、人情友愛

の念が缺乏して居るものである、到底人格の崇高なるものであり得ぬ、我慢我慾の匹夫である、此等の人は如何に大事業を爲したとしても、それは人道の爲めに何等の効献にもならぬのみか、それが爲め却つて人道を頽廢せしむる結果を來すものである、死んだものであるから追祀等は不用のようではあるが、そこが妙なものでなんとも説明の出來ぬ、解釋以上の自然の要求と云ふものがある、ナントナクと云ふ感じがあるのである、此のナントナクと云ふ感を顧みぬものは、最早人間として論ずべきの價のないものである。

夫から英雄崇拜と云ふことは、善いとか、惡いとか云ふ議論は最早問題にならぬ、何人も英雄を崇拜して居る、偉人を尊敬して居る、英雄偉人の感化の大なることは今更蝶々する必要はない、宗教で教主開祖を尊崇するのも、文學者が或詩人文人を追慕するのも、皆英雄崇拜である、其他政治軍事皆偉人英雄を尊重して居る、個人としても社會としても英雄を崇拜する意の絶へぬ間は、活氣があり、向上的である、若し一旦この考がなくなつたときは、最早退化の時期に向ふたのである、老衰したのである、墮落的になつて來たのである。

祖先を追祀する念は、即はち過去の祖先と融和する精神である、吾人が日常父母の面前に於て、容易に惡事を爲し得ぬ如く、又父母に依つて大なる安慰を得る如く、祖先を追祀する一念は、父母祖先を吾人の心界に復活せしめ、之に面接するのである、敬虔の念が湧くのである、從つて其結果は惡事を避け、大なる安慰を得るのである、英雄を崇拜するの

は吾人が英雄そのもの精神、其感化力に融和するのである、而して偉人は絶對の比較的圓滿なる完全なる顯現であるから、吾人が英雄を崇拜するのは、英雄の活力に融和すると同時に又絶對そのものに冥合したるものであると云ふてもよいのである、絶對との冥合がこゝに大なる活力を獲得し來るものであることは、今更云々するの必要はない、自明の理である。

要するに大日本民族が、その建國の事情と相伴ひ、又現實的國民の性格と相待つて、祖先であつてしかも英雄であり偉人である人格の尊崇を勉めて居るのは、古今一貫の通習であり、民俗の特質である、そふしてその何れよりしたるかは詳かでないが、こはその祖先英雄の拜崇と天然の崇拜とがその威力の點に於て、或は德光の點に於て、吾人に同一の感想刺擊を與ゆるより、遂に同化して天然崇拜と祖先英雄崇拜は、全く一致するに至つて居ると同時に、又、それが遂に絶對化して宇宙の大原に到達したのである、天照大神が、皇祖であり、國民の元祖であると同時に德光明徹の偉人であり、しかも太陽のそれであり、また宇宙の大精神の活現である如く、箇性的人格が自然化し、神化し、遂に絶對化して居る、これは釋迦でも基督でも皆そうであつて、釋迦が應身佛であると同時に報身佛であり又法身佛であると云ふことや、基督が人であると同時に神の子であると云ふのと全く同じ意味であつて、絶對の顯現が比較的圓滿なる偉人を神視し絶對化し、人格と超人格とを融即せしめて、絶對の實質を人格の上に若しくは人格を透して認むると云ふことは、吾人の

心理的事實、否、宗教的意識必然の要求と云ふても差支ないのである。

斯く絶對化したる人格であると同時に、超人格的の意義を有するものは、即ち天つ神である、この絶對自然の理に從ふのが神道である、吾人が箇我の念を沒して此天神即ち絶對自然の理に從ひ、絶對と冥合するのが惟神である、惟神と云ふことは畢竟無我である、自我の慾を棄て差別の偏執を離れ、平等自然の境界を指すのである、惟神、かむながら、即ち自然である、我執を離れたのである、差別箇我の見を斷ち、絶對と冥合し自然の道理に順ずるのがかむながらである。要するは惟神の大道と云ふのは、宇宙大精神の活力を自己の内に發見することである、即ち自覺と活動とである、活動すべく自覺し、自覺に基づいて活動することである、かむながら之が實に宗教の眞髓である、道德の根基である、活動の源泉である、人生の大安立である、所謂神道が民種的宗教であり、國家的宗教であると俱に、又普通的人類的宗教であり得るのである、何人も決してこの惟神と云ふことを誤解してはならぬ、又決して之を輕視すべきでない、これ以上に宗教道德の本質は求め得べきものではない。

三、儒教の精髓

儒教の事は諸君の方が克く御存であるから、別に委しくは申上げぬが、世間では儒教は宗教であるとかないとか申すものもあるようですが、そんなことはどうでもよい、倫理は結局宗教的にならねば役には立たぬ、又宗教も倫理と別立してはならぬ、併し倫理即宗

教といふのはよろしくない、倫理は宗教的ならざるべからずで、儒教は宗教的倫理といふべきものである。

儒教で天命を畏れ、上天を敬ふといふのは、即ち絶對に對する敬度の念で、實在感知の觀念である、治心が第一でそれより齊家、治國平天下とゆくので、治心誠意は苦惱不平のない無我である、そうして其最極に於て、知らず〳〵帝の則に從ふとか、心の欲する所に從へども矩を踰へぬといふのは、無我の大我である、無念の大活動である、善惡正邪を超越したる絶對的の善である、活動である、これまでゆかねば眞の儒教でない、儒教の精髓と所謂宗教の本領とはその眞際に至つて毫末も相違はない、そうして此の極致に達するには、對自的には非禮視る勿れ、非禮聽く勿れで、又對他的には社會を匡正して自他相伴ふを要すると爲すのであるから、其時代に合はぬ所だけ取替ゆれば、その骨髓は實に立派なものである。

四、佛教の要旨

一口に佛教といふても、佛教には八千余卷の經論があり、現今我日本に存在するものでも、十三宗五十幾派といふ宗派があり、その唱ゆる所は全たく正反對といふてもよいのがある、併しながらその結局の所を搜つて見れば矢張一致して居る、只此の一致に至る道行に自力門とか他力門とかいふ如き區別があり、又此の一致點に達した後如何にするかといふに就いて大小乘等の別があるのである。

然らばその一致點歸着點は何であるかといふに、只無我になるのである、前申た通り世間では無我といふことを妙に惡く思ひ、自我實現主義の盛な時代に無我では仕方がない、無我と自我實現即ち自己の圓滿なる發達とは丸で正反對のように考へて居る、併し夫等は克く無我の眞相を辨へぬからである、一体この自我、個体個人個我といふものは何であるかといふに、元來吾々は絶對の一部である、實在の顯現である、絶絶が個体といふ形式に由つて拘束されたのである、夫でこの個我といふ考へを取除けば、絶對に致一するのである無我といふことは個我的の考をなくすることで、個人の方かば見れば無我であるが、一方から見れば大我とか眞我とかになつたので、自我實現といふても眞に自己の圓滿なる發展を期するには、どうしても此の小我を抑へて無我的にならねばならぬので、無我も大我も自我實顯も其の實全たく同じものになるのである。

要するに無我といふことは、哲學的には有限が無限に、相對が絶對に致一することである、又心理的に心中の苦惱不平を去ることである、之が實に佛敎大小聖淨各宗の歸着點である、極致である、然るにその大小聖淨、八宗九宗と分れたのは、一方には人心機根が差別あると、又一つは時代國土の相違に由るものである。

元來佛敎中の各宗旨は暫く置き、大乘とか小乘とか、自力門即ち聖道門とか他力門即ち淨土門とかいふ區別に就いて一言しますれば、

小乘は無我に終るもの、大乘は無我より大我的活動に出るもの、即ち小乘は獨善主義、

大乘は博愛主義を兼ねるもの、又小乘は禁欲的の克己主義に由つて無我に達しようと爲し、大乘の尤も發達せるものでは克己と同時に圓滿なる發達を圖つて居る、猶之を哲學的にいへば自己を棄てゝ實在に一致しようといふのと、自我を發展して絶對に至らしめようといふのとの別がある、又小乘は道德上では結果論を主として居るが、大乘では一念發起善惡即分といふので動機論を主として居る。

次に聖道淨土の區別は、均しく大乘中の宗敎的方面の相違で、聖道自力門は智を以て劣情を制し自己を開發して絶對に至らしめようといふのであるが、淨土他力門は高尙の感情で劣情を制し、絶對の支配力を感知して自己を絶對に歸入せしめようといふので、甲は智的時間論、乙は情的空間論である、夫から此の二を調和して自他を統一しようといふのは密敎即ち眞言宗等の所論である。

要するに佛敎の通義とする所は、矢張心中の不平苦痛を去る、即ち貪瞋痴等の三毒五欲の煩惱を去つて無我にならねばならぬといふのであつて、それを去るに就いて、卑い所てはそういふ煩惱の起る所の事柄に接せぬようにしようといふのであるが、それが極高い所になると、貪順痴と慈悲とか智惠とか所謂善惡といふものは二別のものではない、只大小の相違である、小さいこの主我のために貪るのは惡であるが、天下の爲め多くの人のために貪るのは慈悲である、文王一度怒つて天下を治む、文王の怒は瞋も亦可なりといふようなものである、夫で小さな考を大きく發達さすればよいといふようになつて居る、哲學方面

でも矢張此の現象と實在とを別に見て現象を極くつまらぬように見て居つたのが段々進んで現象即實在論になつて來て居るのである。

又世間では佛敎の厭世主義を嫌ひ、大乘佛敎家は厭世主義でないといふけれど、共に違つて居る、佛敎の入り口は何所までも厭世的である、併し此の厭世的の觀念といふものは決つして惡いものではない、厭世の念からでなくては眞の救濟的活動は出來ぬ、厭世觀からでなくて、始めより樂天的である物質的快樂主義は實に困つたもので、夫が罪惡の因である、社會人心腐敗のハチルスである、厭世も厭世に終つては仕方がないけれど、厭世から樂天に出て來るのが、眞の樂天、大々的の樂天である、眞の活動が出來るのである、つまり厭世より樂天に出るのは、無我より大我に出るのである、宗敎の眞髓はこゝに在るのである。

五、基督敎の大旨

十二時を過きましたから簡單に述へますが、世の中では基督敎がドウトか、佛敎がナントか、一神敎がなんとか、多神敎がいけぬ、汎神敎がどうのと申ますが、そんなことは宗敎の本領には至大の關係はないといふてもよい、否、一神多神汎神畢竟一物の三方面である、有神無神、非人格人格超人格說等皆一實在の上に併存して居る意義であるといふのが予の持說である、要する所は吾々は如何にして不平苦痛なく活動し得るかに在るのである。

バイブルの中に心の貧しき者は幸なりとある、如何にもガラクタ道具即ち煩惱が心中に

富んで居つてはならぬ、此の一言は正しく無我の肝要を說かれたものである、又パリサイの人間にて曰く天國は何れの時か至る基督答へて曰く天國は現然として至らす見よや見よ天國は爾の中に在りとゆわれて居る、內界の安慰が即天國であるといふのは實に宗敎の眞髓を得たるものである。

又神、唯一の神、神の子の基督、人でありてしかも人以上の神の子であるとか、天の父靈等いふことは、佛敎の佛身論法身應……、佛凡の相關論、即ち實在と現象、絕對と有限、絕對精神と個体精神の關係を說示したものである、偉人の內的實驗を表明したものである、偉人と絕對との接觸より至大の感化力を發揮することを叙述したものである、何も不思議なことも可笑しいこともない、實際の事である、絕對の力を信じその寄配に由つて心中の安慰を得、宗敎生活に安住したい、させようといふのが基督敎の本義である、實に宗敎の眞面目に得たものである。

六、諸敎の特徵

神道は民族の自然的習慣力に由つて、國家の發達國民固有の生氣を發揮せしむるに頗る有力なるものである、儒敎は日常行動の上に特に學校敎育等の上には必須欠ぐべからざるものにて、日本民族中流に於ける尤も堅固なる士氣を殆んと儒敎の賜物といふも不可なし佛敎は其論議深遠にして西洋の哲學も未だ容易に企及すべからざる所あり、又その宗敎方面は頗る人情の機微を穿てるものありて、尤も難結せる懷疑に對して人生上の解答を與へ

宇宙の眞面目を達觀して悠々自得する所あらしむるものは佛敎の右に出つるものなかるべし、又基督敎は靑年の英氣を誘掖し敬虔の念を起さしめ、社會的活動を奬勵する上に於て幾多の美點ありと思ふ。

之を要するに神道は習慣敎なり、儒敎は意志的道德敎なり、佛敎は智的方面に重きを置く自覺敎なり、基督敎は感情的を主とする救濟敎なり、尤も佛敎の他力門は全たく感情的救濟敎の如きも、その根底には矢張り深遠なる哲學的敎旨を含むものにて猶智的なるを免れざるのである、左れば人各々能あり不能あり、好む所あり嫌ふ所あり、一を以て他を排するは固より公正ならず、而してその歸する所は、先つ內界の安立を得、然る後大々的活動を爲すに在り、竪には權實了未了幾多の差別あるも、橫には平等一味渾沌として一元に歸するものである、又歸さなくてはならぬものであると信じます。

補說

將來の宗敎

宗敎は將來どうなるか、將來はどんな宗敎でなくてはならぬか、宗敎は將來どうすればよいかといふことに就ては種々と說がありますが、先づ其の第一は宗敎があまり澤山あつては仕方がないから、之を打混し統一しようといふので、均しく統一しようといふ中にも又全體の宗敎を總合しようといふのと、佛敎なら佛敎だけ綠一しようといふのとあります第二には在來の宗敎は全然いかぬから悉く之を打ち壞して新なるものを造ろうといふので

之にも倫理を以て宗敎に代へようといふのと、矢張神とか佛とかいふ本尊を立てゝやろうといふのとあります、第三は從來の宗敎の欠点を改良してゆこうといふので、之にも形式だけ改めようといふのと、敎義まで改めようといふのとあります。

いづれの說も各自相應の理由がありますから、それ〳〵信ずる所に努力するのは實によいことであります、併し私の考では統一とか、新造とかいふことは到底も出來ぬと思ふ、要する所は各宗各敎各その特長があり人生の需要に應じて成立したものであるから、各自の特長を發揮さへすれば、それ相應の目的を達し、それ相應の人々に安立を與へ得るものであつて、其最極の所で統一が出來るのである、何主義何敎派はいかぬといふのは間違て自分の宗旨の特長を發揮する爲めに努力せぬ奴が一番いかぬのである、宗敎家の責任を盡さぬのが惡いのである。

序に一言して置くのは、今日の場合には私は偉人の出現を希望して居ります、世には偉人の出現は空望である等申ますが、私の所謂偉人といふのは自己の性格と自己の唱ゆる主義と一致して其の性格の如く主義の如く實行し努力する人物を指すので大したものをいふのではない、學者ではあつても篤實家でなく、篤實家學者でなあつても熱誠努力に乏しいといふものではいかぬ、法然上人の性格は淨土宗の通りで、淨土宗の敎理は法然上人の性格の通りに出來て居る、そうして法然上人は淨土宗の敎旨の如く終生努力せられて居る、それて始めて一宗として成立し今日まで多大の感化力を以て居るのである、弘法大師でも

親鸞上人でも道元禪師でも皆その通りである、性格と主義と努力と一致して始めて感化があるものである、こゝが單に學者や單に道德家といふものと、教育家宗教家といふものの資格が違はねばならぬ所である、此の三者が具足せねば宗教家として教育家として感化を與ゆることは出來ぬのである、小さくてもよい兎に角主義實行の具足といふ意味に於ける偉人がなくてはならぬ、それでなくてはいくら學識があり辨舌が上手でも、感化の効能はない、知らしむることは出來、笑はしめ泣かしむることは出來ても、夫は落語寄席のそれと大差はないのである。

迷中の是非は是非共に非なり。
夢中の有無は有無共に無なり。
名譽の爲めに惠むは僞善なり。
利己の爲めに働は、盲動なり。

宗教の眞髓 終

小野藤太編述書目

一佛教哲學　定價六十錢　明治卅七年十二月七日印刷
一宗教大觀　同　明治卅七年十二月十九日發行
一佛教八面觀　定價三十錢
一弘法大師傳　定價四十五錢
一活動教　定價六錢
一大和魂　品切
一宗教原論　同
一勞働と宗教　定價五錢
一戰爭と宗教　同
一軍人と宗教　同
一女子と宗教　同
一學生と宗教　同
一倫理と宗教　同
一罪惡と宗教　同
一眞言宗大意　定價二錢
一宗教の本領　同
一國體と宗教　定價金五錢

著述兼發行者　小野藤太　東京市芝區高輪臺町十七番地知將院中
印刷者　伯五郎　東京市芝區愛宕町一丁目十六番地
發行所　香取郡教育會　千葉縣香取郡佐原町
印刷所　愛宕活版所　東京市芝區愛宕町一丁目十六番地
發兌元　同愛館　東京市芝區高輪臺町十七番地知將院中

親鸞上人でも道元禪師でも皆その通りである、性格と主義と努力と一致して始めて感化があるものである、こゝが單に學者や單に道德家といふものと、教育家宗教家といふものの資格が違はねばならぬ所である、此の三者が具足せねば宗教家として教育家として感化を與ゆることは出來ぬのである、小さくてもよい兎に角主義實行の具足といふ意味に於ける偉人がなくてはならぬ、それでなくてはいくら學識があり辨舌が上手でも、感化の効能はない、知らしむることは出來、笑はしめ泣かしむることは出來ても、夫は落語寄席のそれと大差はないのである。

迷中の是非は是非共に非なり。
夢中の有無は有無共に無なり。
名譽の爲めに惠むは僞善なり。
利己の爲めに働は、盲動なり。

宗教の眞髓 終

小野藤太編述書目

一佛教哲學　定價六十錢　明
一宗教大觀　同　明
一佛教八面觀　定價三十錢
一弘法大師傳　定價四十五錢
一活動教　定價六錢
一大和魂　品切
一宗教原論　同
一勞働と宗教　定價五錢
一戰爭と宗教　同
一軍人と宗教　同
一女子と宗教　同
一學生と宗教　同
一倫理と宗教　同
一罪惡と宗教　同
一眞言宗大意　定價二錢
一宗教の本領　同
一國體と宗教　定價金五錢

明治卅七年十二月七日印刷
明治卅七年十二月十九日發行

著述兼發行者　小野藤太
東京市芝區高輪臺町十七番地知將院中

印刷者　伯五郎
東京市芝區愛宕町一丁目十六番地

發行所　香取郡教育會
千葉縣香取郡佐原町

印刷所　愛宕活版所
東京市芝區愛宕町一丁目十六番地

發兌元　同愛館
東京市芝區高輪臺町十七番地知將院中

B35

宗教研究會概況

一、本會は眞面目なる研究を貴ひ好奇的破壞的空論を排斥す

一、本會は宗教の時代的發展をし促し教條的頑迷を矯正す

一、本は誠實なる研究的實驗的自覺とに由り中正穩健なる信念の確立を期す

一、本會は公正を主とし教派宗派の偏見を斥く

一、本會員たらんとする者は住所姓名を記し左記の會費半歲分以上を添へ事務所に申込むべし

一、本會費は一ヶ月金拾錢とす

一、本會員には毎月雜誌及佛の教を配布す

一、本會員には本會發行の出版物は實費にて求めに應ず

一、本會講師は博士六名學士十一名大家十三名あり

一、本會は既に多くの講演講習會出發編輯を行へり

一、細則は葉書にて通知すれば送呈す

東京芝區高輪壓町十七番地知將院中

宗教研究會事務所

宗教研究會編纂 佛教全書第一篇 **起信哲學** ●菊版三百頁 代價六十錢 ●一月一日發行

同 第二篇 上 **佛教倫理學** ●前同、 ●二月發行

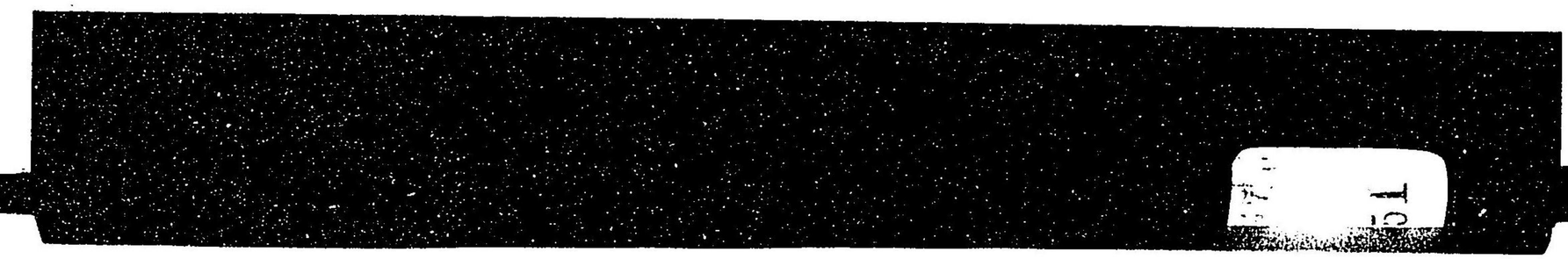
同 第三篇 上 **眞言哲學** ●前同、 ●二月發行

(以下順次發刊)

右第一編は在大學院蟬川文學士の著井上村上兩博士の序文あり、第二編第三編は小野藤太氏の著ふり。

我今一金あり
以て衣るべきか、
以て食ふべきか、
否、否、
以て法を求め、智を磨せん
法智は學生の寶 萬世の光明ふり。

發行所 東京芝區高輪壓町一七知將院中 同愛館



宗教の眞髄

小野藤太

国立国会図書館

013646-000-3

特47-851

宗教の真髄

小野　藤太／著

M37

ABA-0115